研究ノート

# 『摩尼十万語』の基礎的研究（3）

## ――第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」の部分訳とテクストのローマナイズ（2）――

## Basic Research on the *Maṇi bka' 'bum* (3): A Translation and Romanization of Selected Passages in Section 8 of Volume I (2)

佐久間留理子*
SAKUMA Ruriko

The *Maṇi bka' 'bum* is a collection of texts concerning Tibetan King Srong btsan sgam po (A. D. 581-649), in which the king is described as the incarnations of the Bodhisattva Avalokiteśvara. This collection is a part of the literature known as "hidden treasue" (gter ma), which is said to have been mysteriously discovered. In fact, The *Maṇi bka' 'bum* was compiled around the fifteenth century in Tibetan Buddhism. The entire *Maṇi bka' 'bum* collections is divided into three sections, namely the "Sūtra section," and "Sādhana section," and "Sections of instructions." This study aims to present a translation and romanization of selected passages in Section 8 of volume 1, included in the "Sādhana section" describing visualization in Esoteric Buddhism.

キーワード：チベット仏教（Tibetan Buddhism）、ソンツェン・ガンポ（King Srong btsan sgam po）、成就法（Visualization）

### 1.　はじめに

#### (1)　研究の目的・先行研究

チベットの建国王であるとともに、観自在[1]の化身として信仰されてきたソンツェン・ガンポ (Srong btsan sgam po)(A. D. 581-649)[2]は、「埋蔵経典」(gter ma) と総称される典籍の一つである『摩尼十万語』*(Maṇi bka' 'bum)*（*MKB*）[3]を著したと伝えられる。また、それは 12 世紀から 13 世紀にかけて 3 人の経典発掘者 (gter ston) によって発見されたいう伝承がある。しかし、実際には 15 世紀頃に、それまで主に口伝で伝承されてきた観自在信仰が現行の形としてまとめられたものであると考えられている[4]。本稿では、インドで成立した観自在信仰が、チベット仏教においてどのように受容され、変容したのかという視点から『摩尼十万語』第 1 巻のセクション 8 の「大悲者の成就法」(thugs rje chen po'i sgrub thabs) に説かれる「智薩埵の輪の修習」の逐語訳とテクストのローマナイズを行う[5]。

「智薩埵の輪の修習」において行者が観想する「智薩埵」について簡単に説明しておく。「智薩埵」(Skt. jñānasattva, Tib. dam tshig sems dpa') とは、元来、インド密教の成就法（密教的観想法）において、「三摩耶薩埵」と対になっ

---

[1] 「観自在」は、玄奘による新訳であり、サンスクリットの原語「アヴァローキテーシュヴァラ」(Avalokiteśvara)に即した訳語である。また、チベット語の「チェンレーシク・ワンチュク」（spyan ras gzigs dbang phyug）もまた、「観自在」に対応する。インド・ネパールでは、「アヴァローキテーシュヴァラ」の別名として、「ローケーシュヴァラ」（世自在）（lokeśvara）がしばしば用いられる。他方、「観世音」という名称も知られるが、それは鳩摩羅什による旧訳で、「世の衆生の救いを求める声を聞いて救いを与える」ことを意味する（速水, 2000, p. 44）。日本においては「観世音」、「観音」とも呼ばれるが、本稿では上述のサンスクリットの原語やチベット語に対応する「観自在」の名称を用いる。

[2] （山口, 1988, p. Xiii）.

[3] *MKB* は、『摩尼十万語』のチベット語である *Maṇi bka' 'bum* における下線部分の文字を抽出した略号である。本稿では、*MKB* の略号は、『摩尼十万語』のプナカ版木版印刷本とデルゲ版編集本を指す。前者は、Trangyang and Jamyang Samten (1975)によって出版される。後者は、西蔵人民出版社から 2013 (2011) 年に『嘛呢全集（上、下巻）』として出版される。

[4] （山口, 1988, p. 789: Kapstein, 1992, pp. 79-93; 163-169; 石濱, 2001, p. 23 注 26, p. 223 注 1; 槙殿, 2021, pp. 14-17, 谷口 2023, p. 768）.

[5] ローマナイズは、将来、本稿で使用したプナカ版の他に、グンタン版・ラサ版等を使用してテクスト校訂を行うための基礎的作業である。

*大阪観光大学観光学部/　宗教学

て現れる本尊を意味する。トゥッチ (1984, p. 153) によれば、「三摩耶薩埵」（Skt. samayasattva, Tib. dam tshig sems dpa'）は、「精神集中の対象である本尊に理念的に変容した行者が、一時的にその姿をとる『約束の存在』」である一方、これと対になる智薩埵は、「（無始以来存在する根源的な元型に相当する）本尊の『投影』である」と解釈されている。言い換えれば、三摩耶薩埵は、行者が思い描いた仮の姿の本尊（行者でもある）であるのに対し、智薩埵は真理（悟り）の世界から到来する本質的な姿の本尊と言える[6]。このような「智薩埵」と「三摩耶薩埵」を説く箇所は、「大悲者の成就法」の最も重要な核心部分であり、インドの成就法の実践方法がどのようにチベットにおいて受容されているのかを知る上で看過できない。

なお、原典テクストは、プナカ版（Pu)[7]とデルゲ版（D）[8]を使用し、和訳に際しては英訳[9]を参照した。

「大悲者の成就法」（*MKB*, Pu, vol. I, 519, 4-583, 4; D vol. I, 505, 11-546, 19）は、全六章から構成される「大悲者の六輪」(thug rje chen po'i drug skor) (*MKB*, Pu, vol. I, 494, 5-584, 3; D, vol. I, 488, 16-547, 10) の中の第五章 [3)] (Pu, vol. I, 514, 4-583, 4; D, vol. I, 502, 5-546, 19) の一部である。この第五章の各項目は、*MKB* におけるソンツェン・ガンポ王の伝統による「六字真言成就法」、即ち観自在の「実践指南」(dmar khrid) と呼ばれる実践方法の分科 (Pu, vol. I, 424, 1-438, 3; D, vol. I, 417, 10-426, 15) に見出される．この分科は、槇殿（2022）によって和訳されているが、第五章は、それよりも内容を詳しく解説する。

*MKB* に関する先行研究には、次のものがある。槇殿（2021a, pp. 215-491）が、『摩尼十万語』第 1 巻セクション 1 第 1-36 章の和訳とテクスト校訂を公表する。また、槇殿（2021b）は、『摩尼十万語』の如来蔵思想について考察する。谷口 (2023, 2024) は、仏身説に焦点を当てた研究を行う。また、佐久間（2023a）は、『摩尼十万語』第 2 巻第 44 章の部分訳とテクストのローマナイズを公表する。さらに、佐久間（2023b）は、『摩尼十万語』第 2 巻第 44 章所収の「護法王ソンツェン・ガンポによって著された成就法」の特色について考察する。さらにまた、佐久間（2024）は、第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」における「三昧耶薩埵の輪の修習」の部分訳とテクストのローマナイズを公表する[10]。

以上のように、本稿で取り上げる箇所の和訳とテクスト校訂は、先行研究では公表されていない。従って、本研究によって新たな基礎的研究を提示することができる。

### (2)　研究の背景

筆者は、これまでに『摩尼十万語』における成就法の研究を行なってきた（佐久間, 2023a; 2023b; 2024）。本稿は、それらの研究を発展的に継続した続編である。

## 2.　大悲者の成就法

内容の構成

「大悲者の成就法」は、成就法の前行（準備的実践の段階）と本行（本格的実践の段階）に分かれる。この成就法における本尊は、観自在の精髄である六字の呪文（六字真言）[11]「オーム、マニパドメー、フーム」を神格化した六字観自在である。行者は、この本尊との一体化を達成し、それを確固たるものとするために前行と本行と

---

[6] 三摩耶薩埵と智薩埵は、インド中期密教を代表する経典の一つ『初会金剛頂経』にも説かれる（トゥッチ, 1984, p. 170, 注 17, ロルフ・ギーブルによる訳注）（*STTS* p. 147）。三摩耶薩埵と智薩埵に関する先行研究には、トゥッチ（1984）、肥塚（1967）、清水（1977）、奥山（1999）、佐久間（1993）、森（2000）、立川（2004）等がある。

[7] 略号は、参考文献において説明した。

[8] 略号は、参考文献において説明した。

[9] (Trizin Tsering Rinpoche, 2007, vol. I, pp. 813-821).

[10] なお、筆者は、日本印度学仏教学会第 75 回学術大会（2024 年 9 月 7 日、於・駒沢大学）において、「『摩尼十万語』所説の『大悲者の成就法』」と題する口頭発表を行なった。本稿は、その口頭発表資料の一部に基づいている。

[11] インドにおける六字真言を説く経典として、『カーランダ・ヴユーハ・スートラ』（*Kāraṇḍavyūha-sūtra*）（S; V）が有名である。その最古の写本に 7 世紀初頭のギルギット写本が残されていることから、西北インドにおいて編纂されたものと考えられている(M, p. 7; Studholm, 2002, pp. 12-17)。

を実践する。以下に示す各項目の番号は筆者が便宜的に付けたものである。各項目の名称については、槇殿 (2022) を参照した、

前行の構成は、次の通りである。

0.　前置き（Pu, vol. I, 519, 4-5; D, vol. I, 505, 11-14）

1.　大悲者の観自在を成就する者に六つ［の特徴］があること（Pu, vol. I, 519, 6-521, 1; D, vol. I, 505, 14-506, 10）

2.　繋がり（縁）を断つことに、六つあること（Pu, vol. I, 521, 1-523, 1; D, vol. I, 506, 11-507, 18）

3.　*瞑想に適切な*場所を探すことに六つあること（Pu, vol. I, 523, 1-525, 1; D, vol. I, 507, 19-509, 6）

4.　自分自身の必需品・福徳の集まりに六つあること（Pu, vol. I, 525, 1-526, 4; D, vol. I, 509, 6-510, 5）

5.　眷属・従者の繋がりに加わることに六つあること（Pu, vol. I, 526, 4-527, 6; D vol. I, 510, 5-511, 3）

6.　成就に障りが生じないために加持[12]する前行に六つあること（Pu, vol. I, 527, 6-532, 6; D, vol. I, 511, 3-514, 8）

次に、本行の構成は、次の通りである。

1. 六輪の観想（Pu vol. I, 532, 6-562, 6; D vol. I, 514, 9-533, 2, 1）

2. 何を実践するのか（Pu vol. I, 563, 5-565, 6; D vol. I, 534, 1-535, 11）

3. 六つの重要事（Pu vol. I, 566, 1-571, 3; D vol. I, 535, 12-539, 1）

4. 六中有（Pu vol. I, 571, 3-577, 2; D vol. I, 539, 2-542, 20）

5. どこで解脱するのか（Pu vol. I, 577, 2-580, 2; D vol. I, 542, 21-544, 18）

6. 六つの不真実（Pu vol. I, 580, 2-583, 4; D vol. I, 544, 19-546, 19）

以上の中、本行における 1.「六輪の観想」の構成は、次の通りである。

0. 序（Pu vol. I, 532, 6-533, 4; D vol. I, 514, 9-17）

1. 三摩耶薩埵の輪の修習（Pu vol. I, 533, 4-541, 1; D vol. I, 514, 17-519, 10）

2. 智薩埵の輪の修習（Pu vol. I, 451, 1-546, 4; D vol. I, 519, 10-523, 1）

3. 真言輪の念誦・修習（Pu vol. I, 546, 4-553, 6; D vol. I, 523, 2-527, 15）

4. 心の空性の輪（Pu vol. I, 553, 6-558, 4; D vol. I, 527, 15-530, 16）

5. 食物・アムリタの輪（Pu vol. I, 558, 4-561, 4; D vol. I, 530, 16-532, 14）

6. 恐れの無い行道の輪（Pu vol. I, 561, 4-563, 4; D vol. I, 532, 14-533, 21）

これらの中、本稿では、2.「智薩埵の輪の修習」を取り上げる。

### (1)　「智薩埵の輪の修習」

#### 1) 概要

「大悲者の成就法」における「三昧耶薩埵の輪の修習」において、行者は仮の姿の本尊である六字観自在とその脇侍や眷属を観想した後、「智薩埵の輪の修習」において智薩埵（本質的な姿の本尊）を引き寄せる。次に、三昧耶薩埵と智薩埵とが相互に礼拝した後、三昧耶薩埵が智薩埵を供養する。そして、三摩耶薩埵と智薩埵とが不二なるものとして溶けて合一する。その後、行者は、金剛界マンダラの四仏（毘盧遮那、宝生、阿弥陀、不空成就）と金剛薩埵より化現した女神によって、アムリタ（不死の霊薬）を頭頂より流され、灌頂[13]を授けられる。最後に、行者は、灌頂の印として金剛界マンダラの四仏（毘盧遮那、宝生、阿弥陀、不空成就）と金剛薩埵によって頭部を刻印される。これらの一連の実践過程によって、行者は本尊である六字観自在との一体化（神秘的合一）を完成させる。

---

[12] 「『加持』とは、一般的にいって、聖性の位階のより上のものから下のものへ『聖なる』力を付与することをいう」（立川, 2015, p. 186）。

[13] 「灌頂とは秘儀を伝授され得る資格を認める儀礼」である（立川, 2015, p. 552）。

**2）和訳（逐語訳）とローマナイズ**

翻訳に際しては語句を補い、それらを斜体で示した。また、内容を整理するため、便宜的にカギ括弧内に番号を記した。さらに、チベット文の句読線（シェー）は、デルゲ版編集本（D）に従った。

[0] 概略

第二の智薩埵を完成する次第の輪の修習に六つ示される、というのは、*次の通りである*。第一は、*本尊等を*引き寄せる次第 *である*。第二は、礼拝の次第 *であり*、また、第三は、供物を捧げる次第 *であり*、また、第四は、*三摩耶薩埵と智薩埵とが*不二なるものとして溶ける次第 *であり*、また、第五は、灌頂の次第 *であり*、また、第六は、五部族によって*行者が*刻印されることである。

([Pu 541, 1; D 519, 10] gnyis pa ye shes sems dpa' rdzogs pa'i rim pa'i 'khor lo sgom[14] pa la rim pa drug gis ston te zhes pa/ dang po spyan drang pa'i rim pa dang/ gnyis pa phyag 'tshal ba'i rim pa dang/ gsum pa mchod pa 'bul ba'i rim pa dang/ bzhi pa gnyis su med par stim pa'i rim pa dang/ lnga pa dbang bskur ba'i rim pa dang/ drug pa rigs lngas rgyas bdab pa'i rim pa'o//[Pu 541, 2; D 519, 14])

[1] *本尊等を*引き寄せる次第

第一、*本尊等を*引き寄せる次第というのは、*次の通りである*。誰を引き寄せるのかというならば、大悲者を引き寄せる。また、どこから引き寄せるのかというならば、補陀落山[15]、あるいは、*大悲者の*自らの住処より引き寄せる。どのような方法で引き寄せるのかというならば、*行者*自身である三摩耶薩埵によって、智薩埵を二人の友に等しい方法で引き寄せる。引き寄せる目的は、智薩埵によって自らを加持する必要があるのである。引き寄せる三昧というのは、*以下の通りである*。三摩耶薩埵の心臓のフリーヒ *の文字*より光を拡散する、というのは、*次の通りである*。*行者*自身である三摩耶薩埵の大悲者として修習したものの心臓の月輪の上に、白いフリーヒより、白い光を自らの場所において拡散して、*ということである*。智薩埵の大悲者を引き寄せて、というのは、*次の通りである*。智薩埵の大悲者の光によって、生類の利益をなすように促して、光の道に引き寄せて、*智薩埵が*やって来る、*ということである*。現前の虚空に*智薩埵が*お座りになるのを思念するのである、というのは、*次の通りである*。蓮華の座にお座りになって、*行者*自身に顔を向けて、心的に不二であると考えて、修習するのである。

([Pu 541, 2; D 519, 14] dang po spyan drang ba'i rim pa ni zhes pa gang spyan drangs[16] na thugs rje chen po spyan drangs[17] / gang nas spyan drangs[18] na ri bo po ta la 'am rang bzhin gyi gnas nas spyan drangs[19]/ tshul lam thabs ji ltar drangs[20] na/ bdag dam tshig sems dpas lha ye shes sems dpa' grogs mnyam gnyis kyi tshul du spyan drangs[21]/ spyan drangs[22] pa'i dgos pa/ lha ye shes sems spas bdag la byin gyis rlob pa'i dgos pa yod do/ spyan drang ba'i ting nge 'dzin ni/ dam tshig pa'i snying ka'i hrīḥ las 'od 'phros pas zhes pa/ bdag dam tshig sems dpa' thugs rje chen por bsgoms pa'i thugs ka'i zla ba'i dkyil 'khor

---

[14] D bsgom

[15] この山は観自在の降臨する聖地・霊場として、インドの初期大乗仏教経典の一つである『華厳経』「入法界品」（ガンダ・ヴューハ）の第二十七章に説かれる（梶山, 1994, p. 349）（佐久間, 2015, p. 23）。

[16] Pu drang

[17] Pu drang

[18] Pu drangs

[19] Pu drang

[20] Pu drang

[21] Pu drang

[22] D drang

gyi steng na hrīḥ dkar po las ’od zer dkar po rang bzhin gyi gnas su ’phros pas/ yes shes kyi thugs rje chen po spyan drangs nas zhes pa/ yes shes kyi thugs rje chen po ’od zer gyis ’gro don la bskul nas/ ’od zer gyi shul la spyan drangs nas byon te mdun gyi nam mkha’ la bzhugs par bsam mo zhes pa/ padma’i gdan la bzhugs nas [Pu 542, 1; D 520, 2] bdag la zhal bstan te thugs kyis gnyis su med par dgongs par sgom mo//[Pu 542, 1; D 520, 3])

[2] 礼拝の次第

第二、礼拝の次第は、誰に対して礼拝するのかと言えば、智薩埵の大悲者に対して礼拝する。誰が礼拝するのかと言えば、三摩耶薩埵の大悲者が先に礼拝する。どのような礼拝の方法で礼拝するのかと言えば、食物を捧げるように*智薩埵の大悲者に*供物を捧げ、*果に*、善し悪しの無い方法で礼拝する。礼拝の目的は、*何かと言えば*、智薩埵の神と*行者*自身である三摩耶薩埵とが会う必要があるのである。礼拝の三昧は、三摩耶薩埵が智薩埵に礼拝する。三摩耶薩埵の大悲者が、その前に立って智薩埵の大悲者に対して合掌して、先に礼拝する方法で行うことによって、*今度は*、智薩埵が三摩耶薩埵に対して礼拝する、というのは*次の通りである*。智薩埵がお立ちになって、合掌して手で食べ物を捧げるようにして、*三摩耶薩埵に*供物を捧げる。*果に*善し悪しの無い方法で礼拝するのである。

([Pu 542, 1; D 520, 4] gnyis pa phyag ’tshal ba’i rim pa ni/ gang la ’tshal na/ ye shes kyi thugs rje chen po la ’tshal/ gang gis ’tshal na/ dam tshig gi thugs rje chen pos sngon la ’tshal/ tshul lam thabs ji ltar ’tshal na/ phyag phar stob tshur stob[23] byas la bzang ngan med pa’i tshul gyis ’tshal lo// phyag ’tshal ba’i dgos pa lha ye shes sems dpa’ dang/ bdag dam tshig pa brda mjal ba’i dgos pa yod do// phyag ’tshal ba’i ting nge ’dzin ni/ dam tshig sems dpas lha ye shes sems dpa’ la sngon la phyag ’tshal zhes pa/ bdag dam tshig gi thugs rje chen po[24] de sngon la langs la/ ye shes kyi thugs rje chen po la phyag stabs te sngon la ’tshal ba’i ’tshul byas pas[25]/ ye shes sems dpas[26] dam tshig pa la ’tshal/ zhes pa ye shes sems dpa’ bzhengs nas phyag stabs te/ phyag phar stob tshur stobs byas te bzang ngan med pa’i tshul gyis phyag ’tshal lo//[Pu 542, 5; D 520, 12])

[3] 供養の次第

第三、供養の次第というのは、*次の通りである*。誰に供養するのかと言うならば、智薩埵の大悲者に対して供養するのである。誰が供養するのかと言うならば、三摩耶薩埵の大悲者が供養するのである。どのような方法、手段で供養するのかというならば、虚空の蔵である六字の三昧によって、望ましい特質の女神が、*供物を*手に持つ方法で供養するのである。供養の目的は、智薩埵の身口意がお喜びになることによって、*行者*自身である三摩耶薩埵における身口意の成就を生じるためである。供養の三昧は五種の供養によって、というのは、「オーム、マニパドメー、フーム」*という六字*、虚空の蔵、無尽の三昧によって、香、華、香水、食物、燈明、洗面水、音楽等によってということ *である*。三摩耶薩埵が智薩埵に対して供養する、というのは、*次の通りである*。外的な多くの供物が化現して、内的な料理人のような多くの女神によって、秘密の身口意が喜ぶように供養することによって、歓喜と空とが不二である*行者*自身と智薩埵との二つを、法を享受するために智薩埵の遊戯によって供養するのである。指導者である*行者*自身より、多くの女神を化現して、さらに供養することによって、喜ばせる。女神がこちらに集まり、歓喜と空が無尽なるものとして修習する。

([Pu 542, 5; D 520, 13] gsum pa mchod pa’i rim pa ni zhes pa/ gang la mchod na ye shes kyi thugs rje chen po la mchod/ gang gis mchod na dam tshig gi thugs rje chen pos mchod/ tshul lam thabs ji ltar mchod na yi ge drug pa nam mkha’ mdzod kyi ting ’dzin gyis ’dod yon gyi lha mos phyag tshang[27] gi tshul du mchod/ mchod pa’i dgos pa ni/ lha ye ses sems dpa’i sku

---

[23] D stobs

[24] D por

[25] D nas

[26] D dpa’

[27] D tshar

gsung thugs mnyes pas/ bdag [Pu 543, 1; D 520, 16] dam tshig sems dpa' la sku gsung thugs kyi dngos grub 'byung ba'i dgos pa yod do// mchod pa'i ting nge 'dzin ni/ mchod pa rnam pa lnga la sogs pas zhes pa/ oṃ ma ṇi padme hūṃ/ zhes pa nam mkha' mdzod mi zad pa'i ting nge 'dzin gyis/ spos dang/ me tog dang/ dri chab dang/ zhal zas dang/ mar me dang/ zhal bsil dang/ rol mo la sogs pas/ dam tshig sems dpas/ ye shes sems dpa' la mchod ces pa/ phyi'i mchod pa mang po sprul la/ nang gi lha mo mang po[28] phyag tshang ba lta bus/ gsang ba sku gsung thugs mnyes par mchod pas/ don bde stong gnyis med/ rtags bdag dang/ ye shes sems dpa' gnyis chos kyi longs spyod la ye shes kyi rol pas mchod/ mtshon pa bdag las lha mo mang po sprul nas phar mchod pas mnyes/ lha mo tshur 'dus bde stong dbyer med du sgom//[Pu 543, 4; D 521, 3])

[4] *三摩耶薩埵と智薩埵とが*不二なるものとして溶ける次第

第四、不二なるものとして溶ける次第というのは、*次の通りである。智薩埵が*何に溶けるのかと言えば、三摩耶薩埵に溶けるであろう。どのような道・方法で溶けるのかと言えば、水と乳が混ざるように不二なるものとして溶ける。溶ける目的は、*次の通りである。行者*自身である三摩耶薩埵と智薩埵の神の二つが、善悪の二つとして現れる分別を取り除く必要があるのである。不二なるものとして溶ける三昧は、*次の通りである。*三摩耶薩埵の心臓のフリーヒより、というのは、*フリーヒの文字の*白い光の鉤のような先端に、「ジャハ、フム、バム、ホーホ」の四*字*を広げることによって、*ということである。*智薩埵の神が三摩耶薩埵に溶けて、というのは、*次の通りである。*「ジャ」によって引き寄せ、「フーム」によって溶け、「バム」によって不二なるものとして、「ホー」によって、歓喜と空が不二なるものとして喜ばれるのである。水と乳とが混ざるように、不二なるものとして思念する。というのは、*次の通りである。*水と乳とが混ざったもの、それが二つに別れないように、三摩耶薩埵と智薩埵とが不二なるものとして、前よりも明瞭で輝きを有するものであると修習するのである。

([Pu 543, 4; D 521, 3] bzhi pa gnyis su med par stim pa'i rim pa ni zhes pa/ gang bstim na/ ye shes sems dpa' bstim/ gang la stim[29] na/ dam tshig sems dpa' la bstim/ tshul lam thabs ji ltar stim na chu dang 'o ma 'dres pa bzhin du gnyis su med par bstim mo// stim[30] pa'i dgos pa ni/ bdag dam tshig sems dpa' dang/ lha ye shes sems dpa' gnyis bzang ngan dang gnyis snang gi rtog pa bsal ba'i dgos pa yod do// gnyis su med par stim[31] pa'i ting nge 'dzin ni/ dam tshig sems dpa'i thugs ka'i hrīḥ las zhes pa/ 'od zer dkar po lcags kyu lta bu'i rtse la dzaḥ huṃ [Pu 544, 1; D 521, 9] baṃ ho bzhi 'phros pas/ lha ye shes sems dpa' dam tshig sems dpa' la thim nas zhes pa/ dzas[32] spyan drangs/ hūṃ gis bstim/ baṃ gyis gnyis su med par byas/ hos[33] bde stong gnyis su med par dges[34] par bya'o// chu dang 'o ma 'drengs[35] pa ltar gnyis su med par bsam mo zhes pa/ dper na chu dang 'o ma 'dres pa de gnyis su dbyer mi phyed pa ltar dam tshig pa dang yes sems dpa' gnyis su med par sngar bas kyang gsal ba mdangs dang bcas pa sgom[36] mo//[Pu 544, 2: D 521, 13])

[5] 灌頂の次第

第五、灌頂の次第、というのは、*次の通りである。*誰に対して灌頂するのかと言うならば、三摩耶薩埵と智薩埵とが不二である大悲者に対して灌頂するのである。誰によって灌頂されるのかと言えば、五部族の五人の女神たちによって灌頂されるのである。どのような道・方法で灌頂されるのかと言えば、アムリタ（不死の霊薬）の壺の水の流れによって頭頂より身体に満ちるように灌頂されるのである。灌頂の目的は、身口意の三つの不明瞭

---

[28] D pos
[29] D bstim
[30] D bstim
[31] D bstim
[32] D dzaḥ sa
[33] D hoḥ sa
[34] D dgos
[35] D 'dres
[36] D bsgom

さを取り除いて、五智の力を獲得するためである。灌頂の三昧は、心臓のフリーヒより光りが生じて、というのは、*行者*自身である三摩耶薩埵と智薩埵とが不二であると修習する者の心臓の白いフリーヒより、*という意味である*。五種の光が生じて、現前の虚空に五部族を引き寄せ、供物を捧げる、というのは、*次の通りである*。自らの現前の虚空において、日月、蓮華の台に、毘盧遮那、金剛薩埵、宝生、阿弥陀、不空成就の五部族*の部主*を引き寄せ、供養の女神を化現して供養するのである。心臓より、各々の女神が化現して灌頂することによって、五部族の心臓より、水瓶を持った女神が各々生じて、*行者*自身の頭頂よりアムリタの水の流れによって灌頂することによって、アムリタの水の流れによって頭頂より身体を満たすことによって、というのは、*次の通りである*。*また*、斑点の無い白い真珠のようなアムリタが頭頂のブラフマーの穴（頭頂の穴）より根本の空洞に満ちて、体の足の指まで降りて満ちることによって、一切の罪障が浄化すると思念するのである。というのは、*次の通りである*。苦の障りと知られるべきものの障りの一切を浄化して心に障りが存在しないものは、法界智の灌頂である。光輝における空は鏡のような智の灌頂である。平等を認識する心は、平等性智の灌頂である。明瞭な観察において障りがなく各々を認識する智の灌頂である。これら一切は、法界を超えないので、精進の行いの智の灌頂を得るのを修習するのである。

（[Pu 544, 2; D 521, 13] lnga pa dbang bskur ba’i rim pa ni/ zhes pa gang la dbang bskur na/ dam tshig pa dang ye shes pa gnyis su med pa’i thugs rje chen po la bskur ro[37]/ gang gis bskur na/ rigs lnga’i lha mo lngas bskur/ tshul lam thabs ji ltar bskur na/ bdud rtsi’i bum pa’i chu rgyun gyis spyi bo nas lus la khyab par bskur/ dbang bskur ba’i dgos pa ni lus ngag yid gsum gyi sgrib pa dag nas/ yes shes lnga’i dbang thob par byed do// dbang bskur ba’i ting nge ’dzin ni/ thugs ka’i hrīḥ las ’od byung bas zhes pa/ bdag dam tshig sems dpa’ dang ye shes sems dpa’ gnyis su med par bsgoms pa’i thugs ka’i hrīḥ dkar po las ’od zer rnam pa lnga byung nas/ mdun gyi nam mkha’ la[38] rigs lnga spyan drangs la mchod pa phul zhes pa rang gi mdun gyi nam mkha’ la nyi zla padma’i gdan la[39]/ rnam par snang mdzad/ rdo rje sems dpa’/ rin chen ’byung ldan/ snang ba mtha’ yas pa[40]/ don yod grub pa ste/ rigs lnga spyan drangs/ mchod pa’i lha mo [Pu 545, 1; D 522, 1] sprul te mchod do// thugs ka nas lha mo re re sdrul[41] nas dbang bskur bas zhes pa/ rigs lnga’i thugs ka nas lha mo bum pa thogs pa re re byung nas/ bdag gi spyi bo nas bdud rtsi’i chu rgyun gyis[42] dbang skur bas/ bdud rtsi’i chu rgyun gyis spyi bo nas lus la khyab pas/ zhes pa bdud rtsi mu tig dkar po dri ma med pa lta bu/ spyi bo tshangs pa’i bu ga nas rtsa sbugs[43] gang nas/ lus kyi rkang pa’i sor mo yan chad la khyab pas/ sgrib pa thams cad dag par bsam mo zhes pa/ nyon mongs pa’i sgrib pa dang/ shes bya’i sgrib pa thams cad dag nas sems la sgrib pa mi gnas pa chos kyi dbyings kyi ye shes kyi dbang/ sems gsal la[44] stong pa me long lta bu’i ye shes kyi dbang/ sems mnyam nyid du rtogs pa mnyam pa nyid kyi ye shes kyi dbang/ rig pa gsal la ma sgribs pa so sor rtog pa’i ye shes kyi dbang/ de thams cad chos kyi dbyings las mi ’da’ bas/ bya ba nan tan ye shes kyi dbang thob par sgom mo/[Pu 545, 4; D 522, 10]）

[6] 五部族によって刻印すること

第六、五部族の仏によって刻印すること、というのは、*次の通りである*。誰に刻印するのか。三摩耶薩埵と智薩埵とが不二であるもの、それに刻印するのである。誰が刻印するのかと言うならば、五部族*の仏*が刻印するのである。どのような道・方法で刻印するのかと言うならば、五部族の仏の頭飾である冠として刻印するのである。刻印するためには、頭を五仏によって刻印することによって、五つの身体が五智を有する必要があるのである。

---

[37] Pu では省略される。
[38] D では省略される。
[39] D では省略される。
[40] Pu では省略される。
[41] D sprul
[42] D gyi
[43] Pu sbubs (sic.)
[44] D では省略される。

刻印の三昧は、何であるのか。頭の飾りが五部族の仏によって飾られたものとして思念する、ということである。中央には毘盧遮那、額には、金剛薩埵、右耳の辺りに宝生、耳の穴には阿弥陀、左耳の辺りに不空成就、これらによって頭が飾られるので、灌頂の印として正面の前方には、阿弥陀が住するのを修習するのである、というのは、*次の通りである*。五部族が光に溶けることによって、五つの身体と五智によって刻印されて、灌頂を獲得した印として、頭の頂に赤い身体で、定印を有し、赤い衣を着た阿弥陀仏、即ち、変化身の現れを有する五部族の仏の主によって頭が飾られるのを思念するのである。

([Pu 545, 4; D 522, 10] drug pa rigs lnga'i sangs rgyas kyis rgyas gdab pa ni zhes pa/ gang la rgyas gdab na/ dam tshig sems dpa' dang ye shes sems dpa' gnyis su med pa de la rgyas gdab/ gang gis rgyas gdab na rigs lngas rgyas gdab bo// tshul lam thabs ji ltar rgyas gdab[45] na/ dbu rgyan rigs lnga'i sangs rgyas krog (sic.)[46] zhu'i tshul du rgyas gdab bo// rgyas gdab pa'i dgos byed ni/ dbu la rigs lngas rgyas gdab pas/ sku lnga ye shes lnga dang ldan pa'i dgos pa yod do// rgyas [Pu 546, 1; D 522, 15] gdab pa'i ting nge 'dzin gang yin pa ni/ dbu rgyan rigs lnga'i sangs rgyas kyis brgyan[47] par bsams la zhes pa/ dbus su sangs rgyas rnam par snang mdzad/ dpral bar rdo rje sems dpa'/ rna ltag g'yas su rin chen 'byung ldan/ ltag khung du snang ba mtha' yas/ rna ltag g'yon du don yod grub pa/ de rnams kyis dbu brgyan pas dbang rtags su mdun ngos nas sangs rgyas snang ba mtha' yas bzhugs par sgom mo zhes pa/ rigs lnga 'od du zhu bas sku lnga ye shes lngas rgyas btab nas/ dbang thob pa'i rtags su/ dbu'i gtsug tu sangs rgyas snang ba mtha' yas sku mdog dmar po mnyam bzhag gi phyag rgya can/ na bza' chos gos dmar po gsol ba sprul pa'i sku'i cha lugs can/ rigs lnga'i sangs rgyas kyi bdag pos dbu brgyan par bsam mo// [Pu 546, 4; D 523, 1])

## 3.　まとめ

12 世紀頃までにインド密教において成立した成就法集成の一つである『サーダナ・マーラー』（成就法曼, *Sādhanamālā*）には、本稿で取り上げた「大悲者の成就法」の本尊に相当する六字観自在が説かれている。バッタチャルヤ校訂本『サーダナ・マーラー』に収録された六字観自在の成就法等（Bh nos. 6, 7, 11, 12; SR nos. 4.1, 4.2, 4.3, 4.4; 佐久間, 2011, pp. 340-364）の中、本質的な姿の本尊である「智薩埵」は、no. 7「『カーランダ・ヴューハ』の教えによって著された成就法」に、また、「智薩埵」に相当する「智の輪」（Skt. jñānamaṇḍala）は、no. 12「六字成就法」に見出される。しかし、それらには上述の「大悲者の成就法」の「智薩埵の輪の修習」におけるような詳しい表現はみとめられない。このように、チベットで編纂された「大悲者の成就法」では、「智薩埵」に関する実践方法がインドの六字観自在の成就法と比べて格段に整備された構造を有するものとして発展している。

【謝辞】

本稿は、2024 年度科学研究費助成事業・基盤研究（B）（一般）「チベットにおける観音信仰の受容と変容：『王統明鏡史』と『摩尼十万語』を中心に」（課題番号 23K20424）（研究代表者　佐久間留理子）による研究成果の一部である。

【引用・参考文献】

・一次文献・略号

Bh: *Sādhanamālā.* Gaekwad's Oriental Series, no. 26, Baroda: Oriental Institute (Original work: 1925), Bhattacharyya, Benoytosh (Ed.) 1968.

*MKB*: *Ma ṇi bka' 'bum*

Pu: *A Collection of Rediscovered Teachings Focusing upon the Tutelary Deity Avalokiteśvara (mahākaruṇika)*. vol. I and vol. II. (e and vaṃ). Tranyang and Jamyang Samten (Reproduced), New Delhi, 1975.（プナカ版印刷版）

---

[45] D btab

[46] D prog. 現在の正書法では sog が正しい綴りと考えらえる。

[47] D bstan

D:『嘛呢全集（上、下巻）』(*Ma ṇi bka' 'bum, vol. I, Vol. II*) 拉薩: 西蔵人民出版社, 2013 (2011).（デルゲ版印刷版編集本）

M: *Die Gilgitfragmente des Kāraṇḍa-vyūha-sūtra.* Ed. Mette, Adelhaid, Indica et Tibetica 29, Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag, 1997.

SR: *Sādhanamālā: Avalokiteśvara Section, Sanskrit and Tibetan Texts.* Asian Iconography Series III, Delhi: Adroit Publishers Sakuma, Ruriko (Ed.), 2002.

S: *Kāraṇḍavyūhaḥ.* Ed. Sāmaśrami, Satyabrata. Calcutta, 1872.

*STTS*: 『初会金剛頂経梵本（上）SARVA-TATHĀGATA-TATTVA-SAṂGRAHAṂ NĀMA MAHĀ-YĀNA-SŪTRAM』堀内寛仁（ローマ字化・校訂・注記）高野山大学・密教文化研究所, 1983.

V: *Mahāyānasūtrasaṃgraha,* Part 1, Buddhist Sanskrit Texts no. 17 (pp. 258-308), Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, Vaidya, P. L. (Ed.) 1961.

［外国語文献］

・二次文献

［日本語文献］

石濱裕美子（2001）『チベット仏教世界の歴史的研究』ブッキング

奥山直司（1989）「イコンの園へ―パンコル・チョルテン研究序説―」『チベット・曼荼羅の世界』小学館、pp. 131-168.

梶山雄一（監修）(1994) 『華厳経入法界品　さとりへの遍歴（上）』中央公論社

肥塚隆（1967）「瞑想と造形―インド美術における一つの基礎概念―」『南都仏教』20, pp. 60-79.

佐久間留理子（1993）「『サーダナ・マーラー』におけるジュニャーナサットヴァとサマヤサットヴァ」『宮坂宥勝博士古稀記念論文集』（宮坂宥勝博士古稀記念論文集刊行会編）法蔵館、pp. 793-807.

佐久間留理子（2011）『インド密教の観自在研究』山喜房佛書林

佐久間留理子 (2015) 『観音菩薩』春秋社

佐久間留理子（2023a）「『摩尼十万語』の基礎的研究 (1) ―第 2 部第 44 章の部分訳とテクストのローマナイズ―」『大阪観光大学研究論集』23: pp. 33-43.

佐久間留理子（2023b）「『摩尼十万語』の護法王ソンツエン・ガンポによって著された成就法―第 2 巻第 44 章から」『印度学仏教学研究』72 (1): pp. 346-353.

佐久間留理子 (2024) 「『摩尼十万語』の基礎的研究 (2) ―第 1 巻セクション 8 所収「大悲者の成就法」の部分訳とテクストのローマナイズ―」『大阪観光大学研究論集』24: pp. 69-79.

清水乞（1977）「インド宗教儀礼と造形―『サーダナ・マーラー』を中心として―」『日本仏教学会年報』43, pp. 59-72.

立川武蔵（2004）「マンダラ瞑想法の特質」『印度学仏教学研究』53 (1), pp. 231-236.

立川武蔵（2015）『マンダラ観想と密教思想』春秋社

立川武蔵 (2021) 『仏教史』第 1 巻、西日本出版社

田中公明（1990）『詳解　河口慧海コレクション：チベット・ネパール仏教美術』佼成出版社

谷口富士夫 (2023) 「『マニ・カブン』に見られる仏身説の特徴」『印度学仏教学研究』72 (2): pp. 762-768.

谷口富士夫 (2024)「チベットにおける観音信仰から見た仏身説―『マニ・カブン』の所説を中心として―」『東海佛教』69: pp. 69-80.

トゥッチ・ジュセッペ（1984）『マンダラの理論と実践』（ロルフ・ギーブル訳）平河出版社

中村元 (2001)『広説佛教語大辞典』東京書籍

速水侑（編） (2000) 『観音信仰事典』神仏信仰事典シリーズ 4 、戎光祥出版

槇殿伴子（2021a）『チベット建国神話と観自在信仰―『マニ・カンブン』「偉大なる歴史章を中心に」―』起心書房

槇殿伴子（2021b）「『マニ・カンブン』における如来蔵思想」『印度学仏教学研究』69 (2): pp. 806-810.

槇殿伴子 2022 「『マニ・カンブン』における観自在菩薩の「六字真言成就法」：ソンツェンガンポ王の伝統による「実践指南口伝」（dmar khrid zhal gyi gdams pa）：分科と試訳」『身延論叢』27: pp. 1-43.

森雅秀（2000）「インドにおける成就法と儀礼」『高野山大学論叢』35, pp. 23-43.

山口瑞鳳（1988）『チベット下』東京大学出版会

［外国語文献］

Bhattacharyya, Benoytosh (1968b) *The Indian Buddhist Iconography*. Calcutta: Firma K. L. Mukhopadhyay.

Das, Chandra (1983) *Tibetan-English Dictionary* (Compact Edition). Kyoto: Rinsen Book Company.

Ehrhard, Franz-Karl (2013) The Royal Print of the *Maṇi Bka' 'Bum*: Its Catalogue and Colophon. In *Nepalica-Tibetica: Festgave for Christiph Cüppers*, Band 1, Franz-Karl Ehrhard & Petra Maurer (ed.) International Institute for Tibetan and Buddhist Studies GmbH, pp. 143-172.

Imaeda, Yoshiro (1979) Note préiminaire sur la formule Oṃ maṇi padme hūṃ dans les manuscripts tibétains de Touen-Houang. In *Contributions aux Études sur Touen-Houang*. Genève-Paris: Libraire Dorz.

Kapstein, Matthew (1992) Remarks on the *Maṇi bKa'-'bum* and the Cult of Avalokiteśvara in Tibet. In *Tibetan Buddhism: Reason and Revelation*. Goodman, Steven D & Ronald M. Davidson (eds.) Albany, NY: SUNY.

Mallmann, Marie-Thérèse (1948) *Introduction à l'étude d'Avalokiteśvara*. Annales du Musée Guimet, Bibliothèque d'Étude-Tome Cinquante-Septième, Paris: Civilisation du Sud.

Schaik, Sam Van (2006) The Tibetan Avalokiteśvara Cult in the Tenth Century: Evidence from the Dunhuang Manuscripts. In *Tibetan Buddhist Literature and Praxis: Studies in Its Formative Period 900-1400*. pp. 55-72.

Studholm, Alexander, 2002, *The Origins of Oṃ Maṇipadme Hūṃ: A Study of the Kāraṇḍavyūha Sūtra*. New York: State University of New York Press.

Trizin Tsering Rinpoche (Trans.) (2007)*, Mani kabum*. vol. I, vol. II. Singapore: [s. n.].